



第7665号

2022年11月21日(月)

「説明責任」は死語？ 知らんけど

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

◆救いの流行語大賞候補

日本は一体どうなってしまったのか。収束しないコロナ禍、膨らむオリンピック汚職、旧統一教会と政治家を巡る問題、失言大臣…。そんなニュースに触れるたびに力も希望も奪われていくような気になる。

2022年に何か明るいことはなかったのだろうか。毎年12月初めに発表される「現代用語の基礎知識選ユーキャン新語・流行語大賞」の候補に挙げられている今年の世相を表す30語を見てみた。初めて見る言葉も多いのが情けないが、かろうじて知っていた中には、「国葬儀」「キーウ」「宗教2世」などと並んで、野球からの「大谷ルール」「令和の怪物」「村神様」「きつねダンス」などもあり、ほっとする。

野球関係では「青春って、すごく密なので」もノミネートされている。

夏の甲子園で初めて東北に優勝旗をもたらした、仙台育英の須江航監督のこの言葉は印象的だった。同校野球部員や甲子園球児だけでなく、コロナ禍を生きる全国の高校生に拍手を送ってほしい、という温かいエールは大いに共感を呼んだ。

◆いまだに「ルッキズム」

筆者が30語の中で注目したのは「ルッキズム」(外見至上主義)だ。今年の参院選では、男性議員が立候補する新人女性の事務所開きのあいさつで「顔で選んでくれれば1番を取る」と発言。「女性蔑視」「外見差別」と与野党から批判され、謝罪、撤回した。国連の持続可能な開発目標(SDGs)でも「多様性」が重要なキーワードとされているというのに、特に女性に対して、若くて美しいことをよしとする価値観がいまだ社会にまん延していることにあきれる。

そして「ルッキズム」は若い世代においてもSNSの影響で加速している感がある。3年ぶりに紅葉の名所に行ったら、レンタル着物をまとった若い女性やカップルがあちこちで自撮り中。ポーズも表情も素人とは思えないくらい決まっている。映えスポットで自撮りした写真をInstagramにアップしてフォロワーを増やすことに並々ならぬ情熱を注いでいる様子が見て取れた。スマホカメラは高性能で強い味方。さらに美しく加工してくれるアプリで盛り盛りに(効果をプラス)するのだそう。

◆空しく響いた言葉

「インスタ映え」は2017年の流行語大賞。SNS関連用語としては「タグる」「バズる」などをよく聞くが、新語としての旬は既に過ぎているらしい。最近使い方を覚えた「推し活」も昨年の流行語大賞にノミネートされていた。中高年が認識する頃にはもう古いということか。

筆者が20代の頃、50代の上司から、とうに廃れている言葉について「〇〇って、はやってるんだってね」と聞かれ、「そうみたいですね」と笑顔で調子を合わせていたことを思い出す。ちなみに「忖度(そんたく)」は「インスタ映え」と並んで2017年の流行語大賞だった。

関西人として嬉しいのは、ごく普通に世代を超えて使われてきた「知らんけど」が全国区になり、今年ノミネートされていることだ。断定的に小利口なことを言ったときに照れ隠しや場を和らげる意味で「知らんけど」と付け加えたり、自信のない発言の後に「知らんけど」とぼかしたりする。

そういえば、30語の中には「丁寧な説明」もあった。確かに繰り返し使われ、そして空しく響いた言葉だった。知らんけど。
(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所



コメントライナー購読者様へ(PR) ウォール・ストリート・ジャーナルを格安価格でご提供いたします! この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで ◀◀詳細はこちらから

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表) 本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003